

園児を持つ母親の子育て意識と保育者との信頼関係づくりに関する一考察

井 口 均

About the mother's child care consideration and a mutual trusts between
the kindergartener's mothers and the kindergdrten teachers (the day nurses)

HITOSHI INOKUCHI

はじめに

現在、保育の場に限らず、子どもの気になる姿が様々な現象として問題視されている。その背景として、親の問題を無視することはできない。家族形態の多様化と共に子育てに対する親の意識でも多様化が進み、親同士のみならず親と保育者との間でも相互理解が得にくい状況が生じているという。一昨年の児童福祉法改正では、「親の指導」が保育者の職務の一つとして法制化された。これにより、従来は「助言者」という保育者の立場が大きく変化させられ、親と保育者の関係に一種の上下関係ともうけとれる関係が導入されることになった。

さらに、保育所においては「苦情」処理システムが導入され、サービス提供者＝保育者と利用者＝親という関係が業務として位置づけられる事態も生じている。保育所では、規制緩和により、入所定員を大幅にする子どもの受入れや保育者のパート枠規制撤廃による保育者間での引き継ぎ作業の煩雑化などが進行するなかで、ニーズに応える子育て支援事業の充実が新たな関係づくりの中で求められている。適切な指導が親からの苦情を引き出しかねないという矛盾を孕んでいる、指導者とサービス提供者という異質な立場を両立すること自体が決して容易なことではない。親支援、子育て支援における保育者の積極的役割は、どのような関係性を築くことによって果たしうるのか、あらためて検討する必要性が生じている。

1. 問題

親の育児不安等に関する研究は、この間、数多くなされてきた。最も手がかかる1歳児を保育所に預けて働く母親を対象に、諏訪きぬ他(1997)が実施した「鳥取県・埼玉県における子育ての実態と育児ストレス」調査は、子育て支援策が地域の実態やニーズに対応したものであるかを検討している。それによると働く母親の育児ストレスには、「子育てに縛られて自分の自由がない」という不満、「夫が自分のことをよく理解してくれている」か否か、「子どもを互いに預け合える仲間がいる」か否かなどの要因が密接に関係してい

ることが明らかにされた。つまり、一人の女性としての生き方、父親による母親理解度、あるいは地域に助け合える人間関係をつくれているかなどが母親の育児ストレスの強度に深く関係しているのである。他の調査でも同様の傾向が示されている。

今回の調査は、長崎市及び周辺地域の幼稚園・保育所に子どもを預ける母親を対象に、育児ストレスの強度に先行研究で明らかにされた要因が同じように関係しているのか。また、保育者との信頼関係に関する親の現状認識についても補足的な調査を行い、信頼関係づくりを考えていく上での参考資料を得ることを目的とする。

2. 方法

- (1) 対象：無作為抽出した長崎市内にある6私立幼稚園(216名)・8民間保育所(301名)に子どもを預けている母親。合計507名。
- (2) 調査方法：アンケート調査。配布・回収方法は、調査用紙を一部ずつ封筒に入れ、各幼稚園・保育所の園長に母親への配布を依頼。その際、できるだけ園数を増やすために各園の一部のクラスの母親を対象にした。回収は、各園の玄関口に回収ボックス(中に入れると外から取り出せない)を設置し、母親が調査票を直接投函できるようにした。調査票配布開始後、2週間設置して後にボックスを回収。
- (3) 調査内容：主な項目は以下の13項目(各項目で選択肢による回答を基本。)質問項目に関しては、牧野カツコの調査(1982, 1983, 1985)も参考にして作成した。
- | | |
|----------------|---------------------|
| ①父親の育児活動への協力度 | ⑧生活環境と地域(生活圏)に対する意識 |
| ②父親が子どもと遊ぶ時間 | ⑨育児について頼りにする人やもの |
| ③父親に対して期待すること | ⑩保育園・幼稚園生活に対する意識 |
| ④子どものことで気になること | ⑪保育者との信頼関係に対する自己評価 |
| ⑤子育ての悩み・困ったこと | ⑫保育者との信頼関係成立の判断基準 |
| ⑥子育てに対する意識 | ⑬保育者との信頼関係をつる上での課題 |
| ⑦家事に対する意識 | |
- (4) 実施時期：調査票配布2003年6月20日、調査票回収7月4日。
- (5) 回収率：3私立幼稚園(106名)・4民間保育所(168名)の計274名。回収率54%。

3. 結果および分析

今回調査したものから主な項目を中心に集計結果と分析を行う。

(1) 母親の属性について

1) 母親の年齢：最も多かったのが30代前半の110名(40.1%)で、次に多いのは30代後半の64名(23.4%)である。3番目に多かった20代後半の53名(19.3%)を加えると、20代後半から30代までの母親が全体の約83%を占めている。

家族数：最も多かったのが「4人」の122名(44.5%)、次に「3人」の76名(27.7%)であり、「5人」が41名(14.9%)となっている。

2) 子どもの人数：「2人」と回答した母親が最も多くてはほぼ半数にあたる136名(49.6%)を占めている。あとは「1人」が98名(35.7%)、「3人」が35名(12.7%)となっている。1人から2人だけで全体の85%を超えている。家族数の傾向と合わせて考えると、大部分が核家族であることや単身家族も一部含まれていることがわかる。ちなみに核家族は250名

(91.2%)で、単親家族は28名(10.2%)となっている。また、両親どちらかの祖父母と同居しているケースは24名(8.8%)となっている。同居の場合は父方の祖父母よりも母方の祖父母と同居する傾向があり、別居の場合でも母方の祖父母の居宅近くに住む傾向がある。

3) 就業の有無：パートおよびフルタイムの正職員を合わせた場合、178名(65%)の母親が仕事をもっている。母親が仕事をしながら家事・育児をしている。そのうち約65%にあたる116名の母親たちは現在の仕事に対して「満足」または「まあ満足」と回答している。「少し不満」または「不満」と回答した母親は27名(15%)であった。

(2) 父親の育児参加状況と父親への要望について

父親の育児参加状況と父親への要望について、図1では父親がよく行う育児活動とその頻度について複数回答してもらった結果を示している。父親が「いつもする」活動でみた場合、上位3位までの活動内容は「家で一緒に遊ぶ」(83名, 30.3%), 「入浴」(70名, 25.5%), 「屋外で遊ぶ」(56名, 20.4%)となっている。「いつもする」と「時々する」の合計でみた場合でも、順位が一部で入れ替わるものの、同様の活動内容が上位3位を占めている。具体的には、「屋外で遊ぶ」(216名, 78.8%), 「家で一緒に遊ぶ」(202名, 73.7%), 「入浴」(199名, 72.6%)となっている。要するに、屋内外での遊びや入浴については「時々する」を含めると7割以上の父親が参加しているが、食事や排泄の世話あるいは寝かしつけるといった、より手間のかかる活動の参加割合は半数程度と低くなっている。

平日と休日に分けて遊ぶ時間を質問した結果によると、その忙しい父親が平日に子どもと遊ぶ姿を見出すことができる。当然のことながら平日より休日の時間量が多くなっている。しかし平日でも、「1時間前後遊ぶ日がある」父親が96名(35%), 「2~3時間遊ぶ日がある」父親が41名(15%)と比較的多く、両方で過半数を超えている。休日は「ほぼ1日中」の父親が93名(33.9%), 「2~3時間」の父親が79名(28.8%), 「4~5時間」の父親が57名(20.8%)となっている。ほとんどの父親は平日不足がちな親子の交流を休日に補おうとしている。ただし、休日できさえ「まったく遊ばない」父親も5%ほど居ると

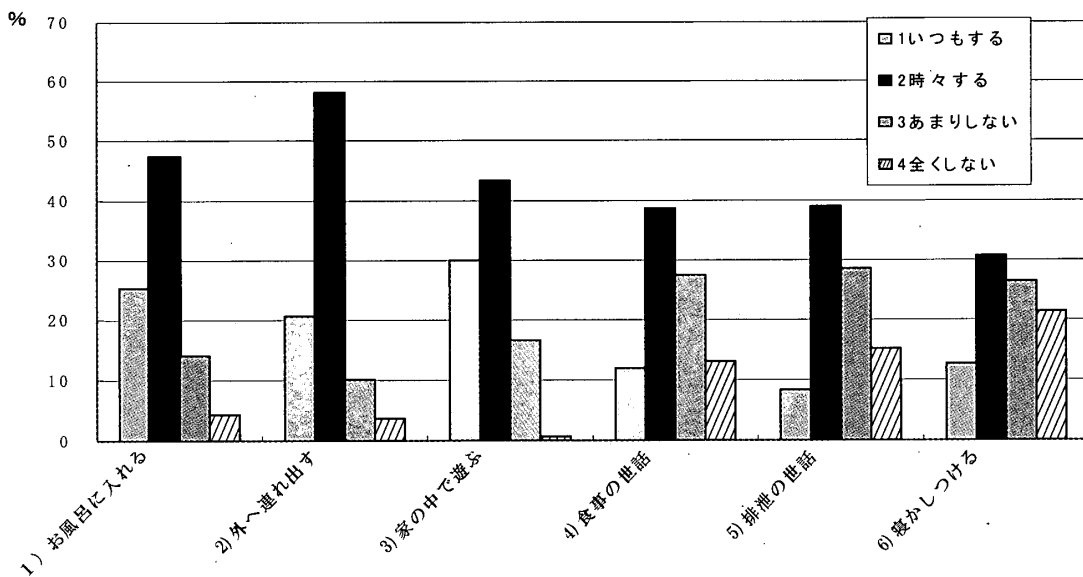


図1 父親の育児参加状況

いう現実もある。

このような状況に母親は満足しているのでしょうか。図2は母親が父親に対して望んでいることを複数選択によって回答してもらった結果である。これによると、母親が父親に望むこととして最も多いのは「子どもの遊び相手になってほしい」(90名, 32.8%)で、「もっと休養をとり身体を休めてほしい」(80名, 29.2%)や「もっと早く帰宅してほしい」(76名, 27.7%)がそのあとに続いている。父親が日頃の生活で仕事に追われている状況を気遣いながら、子どもとの遊び相手としての役割を強く求めていると考えられる。

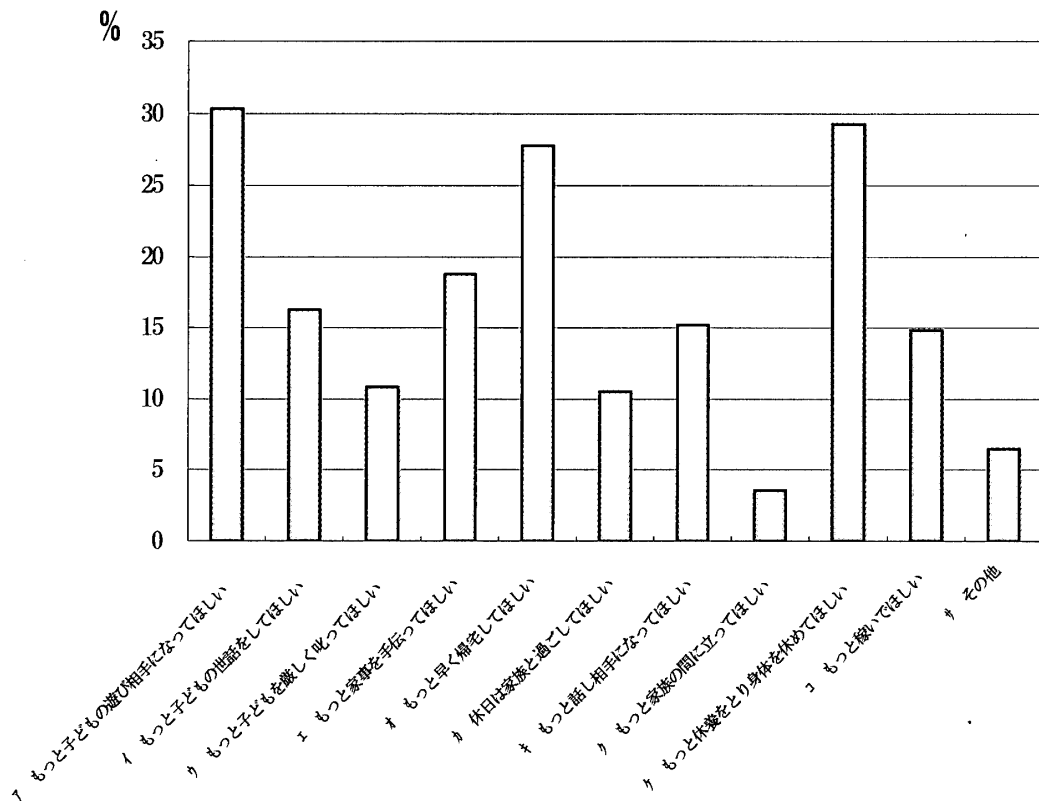


図2 夫に望むこと

(3) 子育ての悩みや困ったことについて

子育てで困ったり悩んだりしたことについて、先行研究などで挙げられた内容ごとにその頻度を選択してもらった結果が図3である。悩むことが「よくある」が10%を超えるものが3項目あるのみで、ほとんどの母親がすべての項目で頻繁に悩んだり困ったりする状況にない。

あえて挙げるとすれば、悩むことが「少しある」とする母親が最も多い「子どものために仕事や趣味を制約されていると感じている」項目、あるいは「ほとんど悩んだことがない」が5割前後と相対的に少なくなっている「子育てから離れて自由になれない」「仕事のために子どもに十分手がかけられない」の3項目である。ここには、子育てに時間を奪われて仕事に就く自由や自由な時間が見失われていることへ不満、また逆に仕事を持つ母親からは子育てに十分時間をかけられないことへの自責の念が示されている。この傾向は、悩んだり困ったりしたことが「少しある」「よくある」を合わせた人数からみた場合から

も裏づけられる。多い順に項目を挙げると、まず「子どものために仕事や趣味を制約されていると感じている」(185名, 67.5%) が最も多く、そのあとに「子育てから離れて自由になれない」(144名, 52.5%), 「仕事のために子どもに十分手がかけられない」(114名, 41.6%), 「近所に子どもを遊ばせる所がない」(113名, 41.2%) などが続いている。

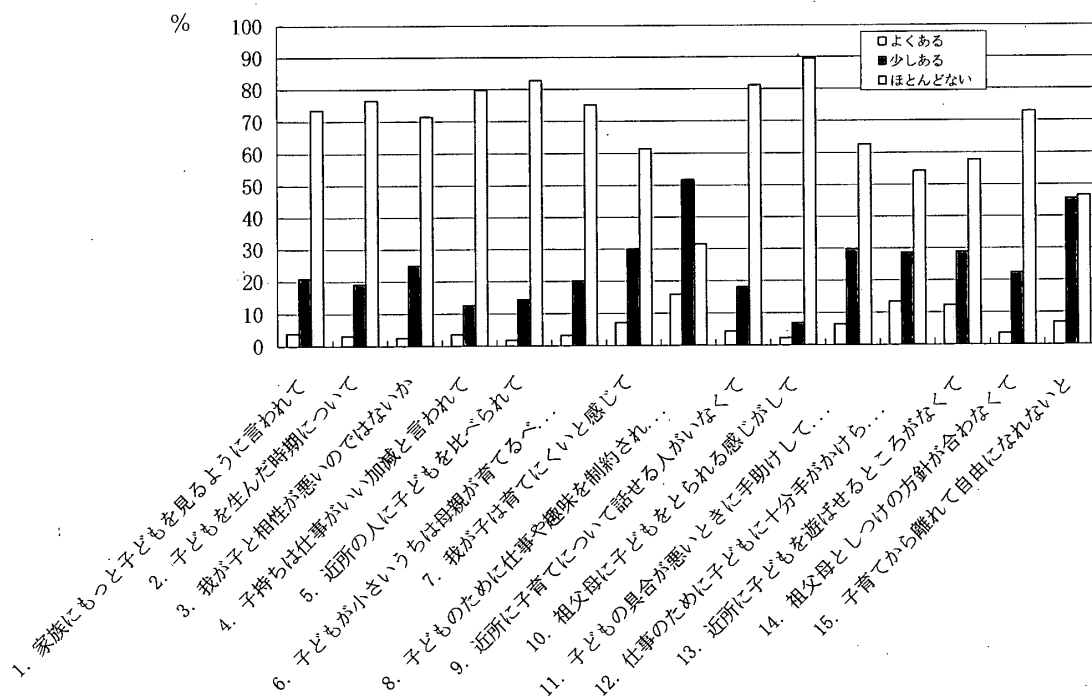


図3 子育ての悩み・困ったこと

仕事で制約されていると感じるのは、仕事を現在していない母親により強く出ているのではないかと考えられる。そこで未就労の母親(123名)に対し、「将来は働きたいか」について回答してもらった結果、やはり大部分の母親が「働きたい」と考えている。「とてもそう思う」(56名, 45.5%)と「少しそう思う」(46名, 37.4%)を合計すると102名(82.9%)に達する。そのことから、就労していない母親であっても働くことへの潜在的意欲は高いと考えられる。また「なぜ働かないのか」への回答で最も多かった理由が「子どもの預け先がない」(57名, 46.3%)であった。このことは、子どもの受入れ先の有無という社会的条件の不整備が、母親の就労をおし止めている主要な原因となっていることを物語っている。

(4) 子どものことで気になることについて

子どもの成長・発達面に関して、具体項目ごとに気になる程度を回答してもらった結果が図4である。今回とり挙げた13のうち10項目については、半数以上の母親が「気にならない」と考えている。ただし、次の3項目については気になっているように思われる。「とても気になる」「少し気になる」を合計した場合、最も多いのが「ダダこねや私の強さ」(167名, 60.9%)で、次に「アレルギーや湿疹」(130名, 47.4%)と「偏食、少食」(130名, 47.4%)が同じ割合で並んでいる。

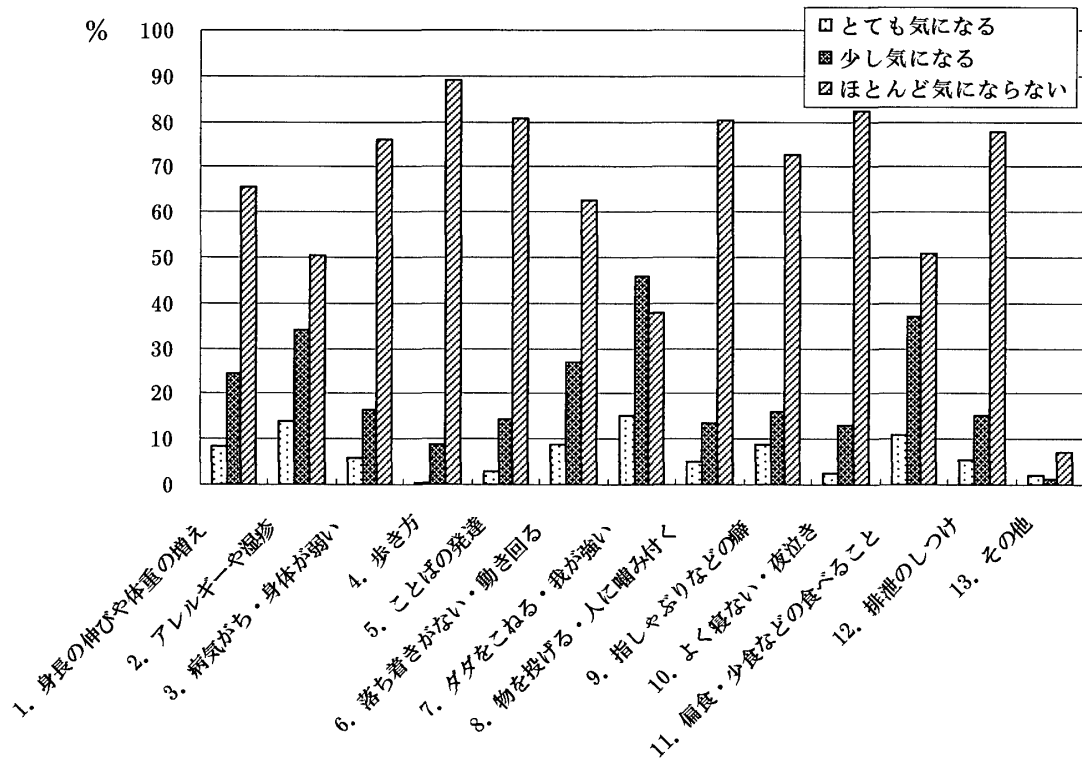


図4 子どもについて気になること

(5) 子育てに対する感情および意識傾向について

6項目の判断基準を用いて、母親が育児活動に対して抱いている感覚や意識を五段階で評価してもらった。その結果を示したものが表1である。この結果から、子育ては「非常にやりがいを感じる」ものであり、どちらかといえば「楽しい」ものと感じている母親が大半を占めていることがわかる。その一方で、子育ての「難しさ」も否定できないものと感じている傾向が読みとれる。他の3項目については「どちらともいえない」という段階3の評価が最も多く、子育てに含まれる複雑な面を感じとっているように思われる。

表1 子育てに対する感情および意識：人数 (%)

	非常にそう思う (-)		ややそう思う (0)			非常にそう思う (+)		
	1	2	3	4	5			
	人数	人数	人数	人数	人数			
やりがいがない	2(0.7)	5(1.8)	54(19.7)	77(28.1)	134(48.9)	やりがいがある		
つまらない	1(0.4)	3(1.1)	69(25.2)	92(33.6)	109(39.8)	楽しい		
難しい	81(29.6)	71(25.9)	89(32.5)	17(6.2)	16(5.8)	易しい		
自分の仕事	18(6.6)	26(9.5)	144(52.5)	42(15.3)	44(16.1)	家族の仕事		
創造的でない	3(1.1)	4(1.5)	128(46.7)	61(22.3)	78(28.4)	創造的である		
抑圧されている	8(2.9)	64(23.4)	133(48.5)	42(15.3)	27(9.9)	開放されている		

(6) 地域の支援的環境について

まず地域における5項目の子育て環境について回答してもらった結果が図5に示すグラフである。身近なところで得られる支援環境として最も多かったのは、人的支援である「子育てについて話し合える人」(138名, 50.4%)であった。次に多かったのは、ほぼ同数に近い「子どもを連れて行ける遊び場」(101名, 36.9%)と「出前とりや外食できる場所」(98名, 35.8%)となっている。「子どもを預け合える子育て仲間」(83名, 30.3%)は3割程度で、最も少なかったのは「催し物をはじめ、子育てを含めた様々な情報が得られる場所」(54名, 19.7%)である。約半数の母親は非常に身近なところで話し相手を見出しており、子どもを預け合える関係も3割の母親がもっている。

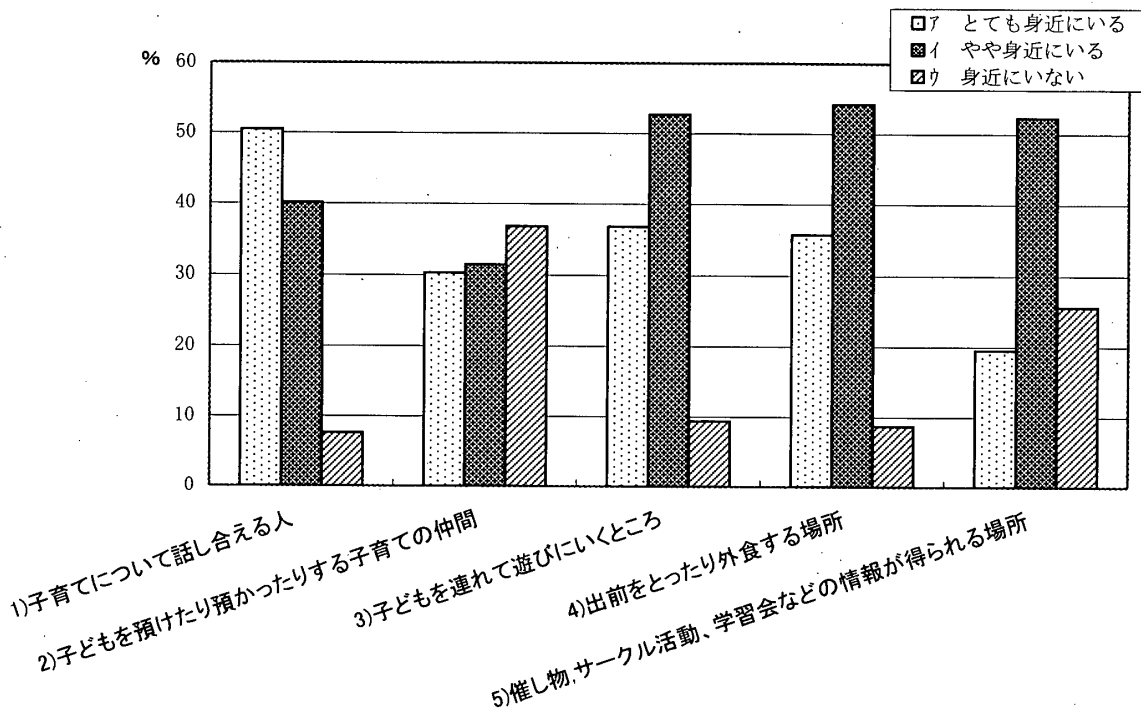


図5 地域にある子育て環境

さらに、困ったり悩んだりした時に「頼りにする話し相手」とは誰かを複数選択で聞いてみると、父親(夫)が最も多くて51.8%となっており、実家の祖父母(48.7%)、保育園・幼稚園・学校の先生(28.5%)、かかりつけの医者(17.7%)の順となっている。子育て支援活動の一環として、その役割が期待されている電話相談はわずか0.7%で、保健所等の専門機関でさえ3.2%に過ぎなかった。

(7) 生活の中で母親が感じる疲労感や不満感について

母親たちが生活の中で感じる疲労感や不満感について、具体的な項目をもとにその頻度を質問した結果を図6に示している。このグラフに関しては人数でのデータ表示になっている。「よくある」と「時々ある」を合計した場合、疲労感や不満感に関係がある項目で最も多いのは「なんとなく疲れがたまる」(247名, 90.1%)であり、次に多いのが「小さ

なことイライラしてしまう」(241名, 88%), そのあとに「時にはすべてのことから解放されたい」(217名, 79.2%)が続いている。他の項目との差が大きい。

その一方で、肯定的な気持ちも示されている。最も多いのは「今の生活にはりあいがある」(244名, 89.1%)で、次に多いのがほぼ同数の「自分は世の中の動きから切り離されているようには感じない」(227名, 82.8%)と「家族の中で自分だけが苦勞しているとは思わない」(225名, 82.1%)である。その他に「今の生活には創造的な要素が少ないとは思わない」(213名, 77.7%)や「自分のやっていることは意味のあることだと思う」(205名, 74.8%)などがある。

このように、疲労感や閉塞感に苛まれながらも、母親の気持ちとしては、社会とのつながりや自分のしていることに意味を見だし、現在の生活を肯定的に受けとめようとしている。こうした矛盾した気持ちを鎮めてもらうために、身近にいる人たちにねぎらいや感謝の言葉を望んでいるのではなかろうか。

(8) 子育てに対する否定的感情の度合いについて

子育てに対する否定的感情を、ここでは表1における項目に対する五段階評価をもとに3つに分類した。まず各項目で選択された五段階評価で用いた選択値をもとに、母親の否定的感情の度合いを6項目の平均値として数量化した。それによって、母親の否定的感情の度合いを、1以上3未満, 3以上4未満, 4以上の三段階に区分し、それぞれ「否定的感情が強い母親」「中間的母親」「肯定的感情が強い母親」として分類する。

1) 父親の育児活動への参加度との関連性

ここでは、3つに分類された母親群と父親の育児活動への参加度との関係を検討した。(2)にある「父親の育児参加状況」での6つの育児活動(「屋外で遊ぶ」「家で一緒に遊ぶ」「入浴」「食事の世話」「排泄の世話」「寝かしつけ」)について、「いつもする」または「時々する」と回答した場合に育児参加度を示す得点として各1点を加えた。その母親ごとの点数をもとに算出した3つの母親群の平均値を次に示している

「肯定的感情が強い母親」ほど、父親の育児参加は少なくなる傾向がある。父親の育児参加が、子育てに対する母親の否定的感情と密接に関係していると考えられる。

- 「否定的感情が強い母親」(54名, 19.7%)における父親の育児参加度平均値：3.0
- 「中間的母親」(178名, 65%)における父親の育児参加度平均値：3.5
- 「肯定的感情が強い母親」(42名, 17.5%)における父親の育児参加度平均値：3.7

2) 子どもについて気になることの多さとの関連性

子どもについて気になることの数は、図4にある12項目について「とても気になる」または「少し気になる」と回答した場合に各1点を加えて母親ごとに点数を算出した。その点数をもとに算出した3つの母親群の平均値を次に示している。

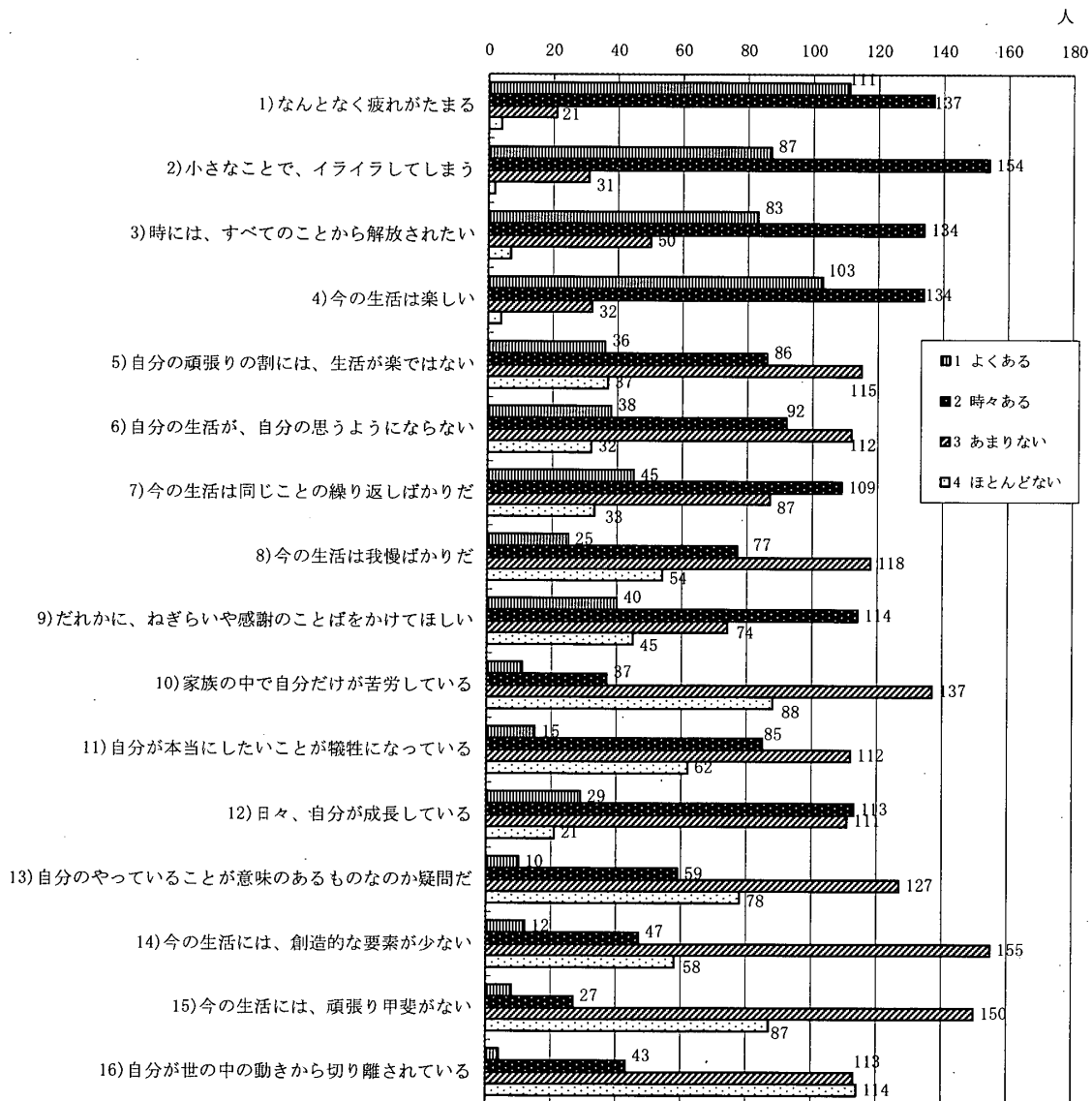


図6 生活の中で感じること

「否定的感情が強い母親」ほど子どもについて気になることは多くなる傾向があり、「肯定的感情が強い母親」の2倍近くになっている。

- 「否定的感情が強い母親」における子どもについて気になる項目数の平均値：4.3
- 「中間的母親」における子どもについて気になる項目数の平均値：3.6
- 「肯定的感情が強い母親」における子どもについて気になる項目数の平均値：2.3

3) 子育ての悩みや困ったことの多さとの関連性

子育ての悩みや困り事の数、図3にある15項目について「よくある」または「少しある」と回答した場合に各1点を加算し、母親ごとに点数を算出した。その点数をもとに算出した3つの母親群の平均値を次に示している。

「否定的感情が強い母親」ほど、やはり子育ての悩みや困ったことが多いことがわかる。「肯定的感情が強い母親」の2倍以上となっている。

- ・「否定的感情が強い母親」における悩みや困り事の平均値：6.5
- ・「中間的母親」における悩みや困り事の平均値：4.6
- ・「肯定的感情が強い母親」における悩みや困り事の平均値：3.0

(9) 日常生活で感じる疲労感や不満感の蓄積度と子育て環境について

ここでの疲労感や不満感の蓄積度とは、図6にあげた16項目の中から「今の生活は楽しい」と「日々、自分が成長している」を除いた14項目について、「よくある」または「時々ある」と回答した場合に各1点を加えて計算した。それをもとに母親ごとの疲労感や不満感の蓄積度を14項目の合計点として数量化し、1～5点、6～10点、11点以上の三段階に区分した。各段階は、それぞれ「疲労感や不満感の蓄積度が低い母親」、「中間的母親」、「疲労感や不満感の蓄積度が高い母親」として分類した。

1) 父親の育児活動への参加度との関連性

(8)の1)と同様の方法で父親の育児参加度を計算し、その点数をもとに算出した3つの母親群の平均値を次に示している。

「疲労感や不満感の蓄積度が高い母親」は、やはり「疲労感や不満感の蓄積度が低い母親」よりも父親の育児参加度が低くなっている。

- ・「疲労感や不満感の蓄積度が高い母親」(91名, 33.2%)
 における父親の育児参加度平均値：3.3
- ・「中間的母親」(94名, 34.3%)における父親の育児参加度平均値：4.1
- ・「疲労感や不満感の蓄積度が低い母親」(89名, 32.5%)
 における父親の育児参加度平均値：4.4

2) 利用可能な支援的環境条件との関連性

図5で挙げた5項目の子育て支援環境(人や施設など)について、各項目ごとに利用できる場合と回答した場合に1点を加算することで、支援的環境条件レベルの度合いを母親ごとに算出した。その点数をもとに算出した3つの母親群の平均値を次に示している。

「疲労感や不満感の蓄積度が高い母親」は「疲労感や不満感の蓄積度が低い母親」より、支援的環境条件の平均値が低い傾向を示しているが、それほど顕著な差ではない。

- ・「疲労感や不満感の蓄積度が高い母親」における支援的環境条件の平均値：3.7
- ・「中間的母親」における支援的環境条件の平均値：4.1
- ・「疲労感や不満感の蓄積度が低い母親」における支援的環境条件の平均値：4.3

3. 保育者との信頼関係に対する母親の意識

(1) 幼稚園・保育所に対する母親の評価について

わが子の園生活を母親がどのようにみているか、6項目に対する回答結果をまとめたのが図7である。全項目で「とてもそう思う」と回答した母親が最も多く、「子どもは他の子と一緒にいるのが楽しそうだ」(215名, 78.8%)や「子どもは園に行くことを喜んでいるようだ」(207名, 75.5%)に対して「とてもそう思う」と回答している母親が非常に多い。保育者に対しても、「ていねいに保育してくれる」(183名, 66.8%),「好きな保育者がいる」(151名, 55.1%)など、保育者と子どもとの直接的関係を肯定的にとらえて「とてもそう思う」と回答している母親が多い。しかし、母親との関わりを示す「保育者は、子育てのアドバイスをしてくれる」に対して「とてもそう思う」と回答した母親は102名(37.2%)であり、他の項目と比較すると最も少なくなっている。

(2) 信頼できる保育者を持つ母親の割合について

子どもが通う園で母親が信頼関係をつくらせている保育者がどの程度居るのかについて回答してもらった結果が図8である。これを見ると、最も多いのは「クラス担任や一部の保育者とだけできている」(112名, 41.2%)であり、次に園の「半数程度の保育者」(68名, 24.8%)となっている。両者で過半数を占めている。その一方で、「クラス担任とだけできている」(35名, 12.8%)や「どの保育者ともできていない」(11名, 4%)と回答した母親も少ないながら存在している。残りの17%の母親は全員あるいは一部の保育者以外と信頼関係ができていないことを考えれば、ほとんどの母親が保育者と信頼関係ができていると考えられる。

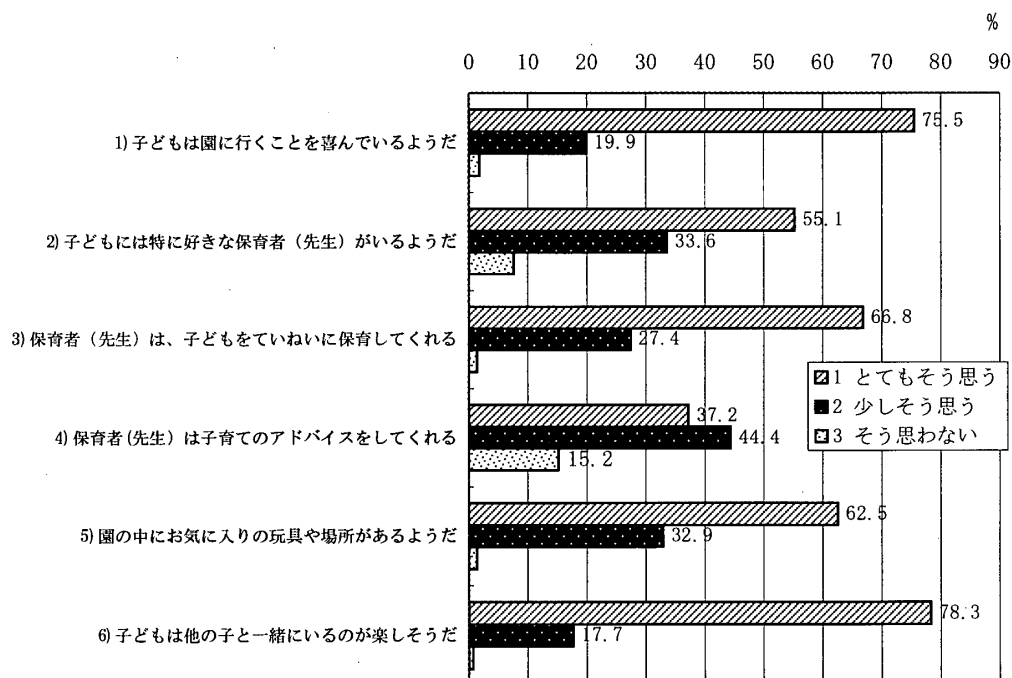


図7 子どもの園生活に対する母親の評価

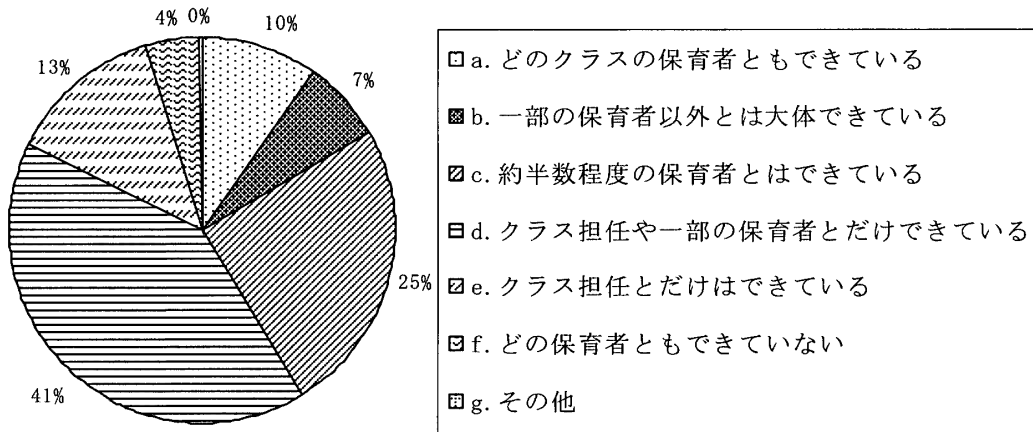


図8 信頼できる保育者が園にどれだけ居るか

(3) 信頼関係成立の判断基準について

母親は保育者との信頼関係をどこで判断するかについての回答結果をまとめたものが図9である。最も多かったのは「子どものことを話せるだけでなく、園行事にも協力している」(118名, 43%)、次に「子どもについて話せるだけで十分である」(101名, 36.9%)となっている。この結果からわかることは、当然のことだが、子どものことでのいろいろな会話ができるか否かがまず重要な判断基準となっており、その上で、園行事に参加していれば、さらに信頼関係に結びつくということであろう。「子どもについて話せるだけで十分である」が102名(37.2%)に対し、「園行事に参加するだけで十分」と判断する母親はわずか14名(5.1%)に過ぎないのである。そのことから、子どものことを話せるかどうかにより重要な意味を持っていると指摘できるであろう。また、母親は自分の生活上での悩みを相談できるか否かをそれほど重視しているとは限らないという傾向も示唆された。ただし、単独の項目として質問したわけではないので断言することはできない。いずれにせよ、子どものことをあれこれと話せること、それを保育者が受け止めてくれる関係ができていれば、保育者との間で信頼関係が成立していると感じていることがわかる。

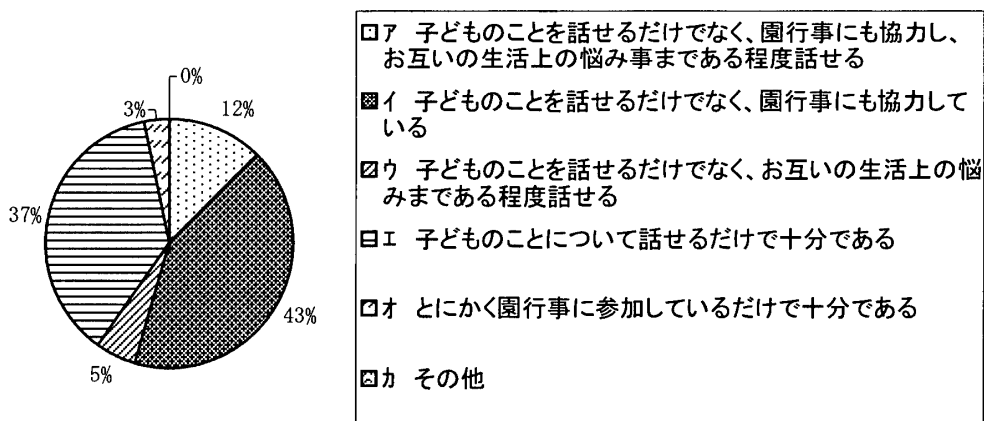


図9 保育者との信頼関係成立の判断基準

4. まとめにかえて

(1) 4つの視点から

1歳から5歳の子どもを持つ母親が抱える子育て意識についてアンケート調査を行った。その結果に関して、生活ストレス・育児ストレスとの関連が重視される次の4点について、何が指摘できるかを簡単にまとめておきたい。

第1は、父親の直接的な育児参加の問題である。「お風呂に入れる」「外へ連れ出す」「家の中で遊ぶ」では「いつもする」「時々する」と回答する母親が比較的多く、「食事の世話」「排泄の世話」「寝かしつける」では明らかに低かった。これは、前者が、父親にとっても楽しさを実感しやすい「楽しい面」であるのに対し、後者は手間がかかる上、子どもと対立が生じやすい「大変な面」である点に関係していると思われる。

父親の直接的な育児参加と母親の生活ストレスとの関係を見てみると、特に後者の「食事の世話」「排泄の世話」「寝かしつける」で、父親が「しない」と答えた母親は、生活ストレスを多く感じている。これにより、父親の育児全般にわたる直接的な参加が、母親の生活ストレスを軽減する可能性が高い。

父親の間接的な育児参加においては、「子どもの心配があるときに夫に相談する」では母親の生活ストレスとの関係が見出せなかったものの、「子どもの様子を夫婦で話し合う」では、次のような傾向がみられた。つまり、「子どもの様子を夫婦で話し合う」ことが「ない」と回答した母親の不満感は「ある」と回答した母親よりも強かったのである。

第2は、仕事と育児の両立の問題である。今回の調査では、半数以上の母親が仕事をしながら家事と育児をしていた。仕事をしている母親のうち、約70%が「家事・育児全てを任されるのは負担が大きすぎる」と感じていた。

仕事をしていない母親については、「働きたいが子どもの預け先がない」と感じている母親が約半数の46%を占めていた。また、また、「将来は働きたいと思うか」に対して約83%の母親が「そう思う」と回答している。このことから、働く母親に対してだけでなく、専業主婦に対する保育サービスの充実が強く求められている。しかしその一方で、「子どもを保育所に預けることは心配」と感じている母親が42%も居たことも付け加えておきたい。保育の質が求められているのであろう。

第3に、一人の女性としての生き方の問題である。今回の調査で、「子どものために仕事や趣味を制約されている」に対して、約68%の母親が「よくある」「少しある」と答えている。また、「子育てから離れて自由になれない」と感じている母親は約53%にも達している。このことから、多くの母親は、「母」として生きるだけでなく、自分自身のために生きたいと感じていることがうかがえる。しかし、子育てに「やりがいがある」と感じている母親が約77%、「楽しい」と感じている母親も約73%の割合で存在している。このことは、どちらか一方のみの選択ではなく、「子育て」も「子育て以外の自分の生活」も大切にしたいという母親たちの両立への志向を示していると言えよう。

第4は、子育てしやすい地域環境づくりの問題である。今回の調査で、「子育てで頼りにする」もので上位を占めた「夫」や「実家の父母」の2項目に対して、「頼りにする」と回答した母親はどちらの項目でも50%程度であった。つまり、残りの約半数の母親は育児を一人で抱え込んでいる可能性が高いのである。身近な地域環境に関しても、「近所に子育てについて話せる人がいなくて」、悩み困ったことが「よくある」「少しある」と回答

した母親は20%を割り込む程度ではあるが、確実に存在している。また、「近所に子どもを遊ばせるところがなくて」悩み困ったことが「よくある」「少しある」と答えた母親の場合は40%以上にも上る。同じ年頃の子どもの持つ母親同士が、ふれあい、育児について話せる機会や場所が失われているのである。

(2) 先行研究と比較した場合にみられる長崎市の特徴

先行研究である鳥取・埼玉の調査と長崎市の調査結果を比較した場合の違いをいくつか指摘しておきたい。

まず第1に、生活の中で子育てに感じることの違いを指摘することができる。つまり、鳥取や埼玉よりも今回の長崎市の母親の方が全体として肯定的にとらえている傾向がある。ただし、次に挙げるいくつかの項目では長崎の方が否定的にとらえている母親がわずかだが多かった。たとえば「自分が世の中の動きから切り離されていると感じる」や「時には全てのことから解放されたい」などで「よくある」「少しある」の割合がより多く、生活に対して抑圧されたイメージをより強くもつ傾向がある。参考までに数値を示すと、「自分が世の中の動きから切り離されていると感じる」：長崎市17.2%に対し、鳥取14.8%、埼玉14.1。「時には全てのことから解放されたい」：長崎市79.2%、鳥取77.0%、埼玉78.3%）である。

第2に、子育てにおける悩みや困ったことから考えると、育児に対して抑圧された感情を抱く母親が多少多いのではなかろうか。この点に関する数値としては、「子どものために仕事や趣味を制約されていると感じる」（長崎市67.5%、鳥取55.0%、埼玉54.8%）「子育てから離れて自由にならない」（長崎市52.5%、鳥取46.2%、埼玉47.2%）「我が子との相性が悪いのではないかと思う」（長崎市27.4%、鳥取10.2%、埼玉12.4%）となっている。

第3に、子育てに対する父親からの性別役割の押しつけは長崎の方が比較的より少ないのではないかとと思われる。たとえば今回はデータを割愛したが、「夫は私が家事や育児に専念することを望んでいる」項目について、長崎市の母親は「そう思う」「少しそう思う」の合計が40.1%であるのに対し、鳥取では77.3%、埼玉では約85%であった。

こうした相違点が生じた背景には、対象となった母親数の規模の違い、また今回の調査が1～5歳児をもつ母親であったのに対し、鳥取・埼玉では1歳児の母親だけに限定していたことなどが関係していると思われる。今後、さらに検討する必要がある。

参考文献

- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる・田丸尚美・角本典子 1997 「鳥取県における子育ての実態と母親の育児ストレス—1歳児を保育園に預けて働く母親の場合—」 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第38巻 第2号 301-345
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる・田丸尚美・角本典子 1997 「埼玉県における子育ての実態と母親の育児ストレス—1歳児を保育園に預けて働く母親の場合—」 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第39巻 第1号 83-129
- 牧野カツコ 「乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉」 1982 家庭教育研究所紀要 No. 3 34-56

- 牧野カツコ 「働く母親と育児不安」 1983 家庭教育研究所紀要 No. 4 67-76
同 上 「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活及び意識との関連—」 1985
家庭教育研究所紀要 No. 6 11-24

謝 辞

本研究のため調査にご協力くださった保育所・幼稚園の保育者の方々，回答して下さった保護者の皆様，大変ありがとうございました。多く質問項目にご丁寧に回答して下さったお蔭で貴重な資料を売ることができ，感謝しています。